

病虫害発生予報 第4号

(向こう1ヶ月間の発生予報)

I 総括表

作物名	病虫害名	地域	発生量	発生時期	摘要
水稲	葉いもち	全域	並	並	
	紋枯病	全域	並	並	
	ツマグロヨコバイ	全域	並	並	
	セジロウンカ	全域	並～やや少	並	
	イナゴ	全域	並	やや早	
	イナゴ(イナゴゼリ)	全域	並	並	
	カメムシ類	全域	並～やや多	並	
りんご	黒星病	全域	やや多		
	斑点落葉病	全域	並		
	褐斑病	全域	並	並	
	輪紋病	全域	並	並	
	炭疽病	全域	並	並	
	リンゴハダニ	全域	並	並	
	ナミハダニ	全域	やや多	やや早	
	ナシヒメシンクイ	全域	並	並	
	モモシンクイガ	全域	並	並	
	リンゴコカクモンハマキ(ハマキムシ類)	全域	並	並	
	キンモンホソガ	全域	並～やや多	並	
	スモモヒメシンクイ	全域	やや多	並	
なし	黒斑病	全域	並		
	黒星病	全域	並		
	輪紋病	全域	並	並	
	うどんこ病	全域	並		
	枝幹性病害(胴枯・枝枯病)	全域	並		

	ハダニ類	全域	並～やや多		
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	並	
	シンクイムシ類	全域	並	並	
	クワコナカイガラムシ	全域	並	早い	
	カメムシ類	全域	多い		
もも (ネクタリンを除く)	黒星病	全域	並		
	せん孔細菌病	全域	多い		
	灰星病	全域	並	並	
	ハダニ類	全域	並	並	
	シンクイムシ類	全域	並	並	
	モモハモグリガ	全域	並	並	
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	並	
ぶどう	べと病	全域	並	並	
	晩腐病	全域	並	並	
	さび病	全域	並	並	
	チャノキイロアザミウマ	全域	並	並	
	ブドウトラカミキリ	全域	並	並	
	クビアカスカシバ	全域	並～やや多	並	
きゅうり	斑点細菌病	全域	やや少	並	
	べと病	全域	やや少	並	
	うどんこ病	全域	やや少	並	
	炭疽病	全域	やや少	並	
	褐斑病	全域	やや少	並	
	モザイク病	全域	並	並	
トマト	灰色かび病	全域	やや少	並	
	輪紋病	全域	並	並	
果菜類	アザミウマ類	全域	並～やや多	並	
	アブラムシ類	全域	並～やや多	並	
レタス	べと病・菌核病・ 灰色かび病・すす病	全域	やや少	並	
	斑点細菌病	全域	並	並	
	軟腐病・腐敗病	全域	並～やや多	並	
アブラ科野菜	黒斑細菌病	全域	並	並	
はくさい	ピシウム腐敗病	全域	やや少	並	
	軟腐病	全域	並～やや多	並	
	べと病	全域	やや少	並	

アスパラガス	茎枯病	全域	並	並	
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全域	並～やや多	並	
	ヨトウガ類	全域	並～やや多	並	
	ハモグリバエ類	全域	並～やや多	並	
	アブラムシ類	全域	並～やや多	並	
	アザミウマ類	全域	並～やや多	並	
	ハダニ類	全域	並～やや多	並	

※発生時期の空欄は、発生時期の関係ないものや常時発生のもを示す。
※地域指定がある場合は、その地域以外は、発生量、発生時期とも「並」を示す。

Ⅱ 向こう1ヶ月の気象予報（長野気象台 7月12日発表）

1 予想される向こう1ヶ月の天候（7月14日～8月13日）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

2 向こう1ヶ月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	2 0	7 0
降 水 量	4 0	4 0	2 0
日照時間	3 0	3 0	4 0

Ⅲ 水 稲

1 葉いもち

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

- ① 葉いもち感染予測モデル「BLASTAM」によると、6月1半旬から6半旬にかけて感染好適条件の出現回数は平年並の傾向であった（平年比118.2%）。
 - ② 7月上旬の常襲発生地で軽微だが発生を確認、巡回調査の数地点でも発生を確認しており、今後の気象条件によっては病勢が進展することもあるので注意する。
 - ③ 気象庁の1か月予報によると、気温は平年より高い確率が70%と、降水量は平年並み及び平年より少ない確率がともに40%と予想されている（±）。
- (3) 防除上の留意点
- ① 気象情報や葉いもち感染予測モデル「BLASTAM」等予測情報、ほ場観察による早期発見に努め、発生が確認されたら直ちに防除する。
 - ② キタジンP、カスガマイシンまたはMBI-D剤の耐性菌が認められている地域では、他系統の薬剤を用いる。

- ③ 窒素過多はいもち病の発生を著しく助長するので、過剰な追肥は控える。
- ④ ほ場の発生状況を確認するとともに、今後の気象情報及び発生予察情報に注意して防除要否を判断する。

2 紋枯病

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

- ① 前年の病斑上に形成された菌核が土中で越冬し翌年の伝染源になるため、前年発生したほ場で発生する傾向がある。前年の発生量は平年並みからやや少なかった。
 - ② 高温及び降雨は発生を助長する。気象庁の1か月予報によると、気温は平年より高い確率が70%と、降水量は平年並み及び平年より少ない確率がともに40%と予想されている（±）。
- (3) 防除上の留意点
- ① 病斑が上位葉鞘に進展し始める時期(出穂2週間前頃)に薬剤散布を行う。

3 ツマグロヨコバイ

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

- ① 第1世代成虫の発生量は平年並からやや少なかったとみられる。
 - ② 気象庁の1か月予報によると、気温は平年より高い確率が70%と予想されている（+）。
- (3) 防除上の留意点
- ① 有機リン剤及びカーバメート剤に対して、感受性の低下している地域では混合剤を使用する。

4 セジロウanka

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや少 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯では誘殺がみられなかった。7月上旬のネット20回振調査で成虫の捕獲数は、平年に比べ少ない傾向にあった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 今後の予察情報に注意する。
 - ② 防除対象となる飛来第2世代幼虫の防除適期は、平年並に推移した場合は8月上旬頃と予測される。
 - ③ 若齢幼虫は株元に生息するので、薬剤は株元にかかるよう丁寧に散布する。

5 イナゴ

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：やや早

(2) 予報の根拠

- ① 前年の発生が多かった地域では、越冬量が多い傾向と推察される。
 - ② 7月上旬のネット20回振調査で成虫は、捕獲地点率は平年並みで、捕獲数は平年並みからやや少なかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 7月中旬頃までに防除を実施する。

6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 千曲市における黄色粘着トラップによる予察調査では、第1世代成虫の7月第2半旬で誘殺を確認した。
 (3) 防除上の留意点
 ① 北信地方の晩植地域における第2世代幼虫の防除適期は、例年は8月上旬頃である。

7 カメムシ類（斑点米）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 予察灯によるアカヒゲホソミドリカスミカメ第一世代成虫の誘殺調査では、発生時期は概ね平年並だが、数地点の誘殺数は平年に比べ多い傾向で推移している。
 ② 気象庁の1か月予報によると、気温は平年より高い確率が70%と予想されている（+）。
 (3) 防除上の留意点
 ① ほ場周辺のイネ科雑草（特にイタリアンライグラス、スズメノカタビラ等）が発生源となるので、草刈りを行う。ただし、出穂間近の畦草刈りはカメムシ類を本田内に追い込む恐れがあるため、出穂2週間前までに終了させる。
 ② 斑点米の発生は、出穂の早い品種や作型で多い。
 ③ 防除適期は、出穂7～10日後である。発生が多い場合には、さらに7～10日後に2回目の薬剤散布を行う。

IV りんご

1 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多**
 (2) 予報の根拠
 ① 巡回調査において、7月上旬までの発生量は「やや多」であった。
 (3) 防除上の留意点
 ① 夏期は感染が停滞するが、感染が多かった園では定期的な散布に心掛ける。
 ② DMI剤耐性菌の発生地から苗木を導入した園地及び周囲の園地では、黒星病の発生状況の把握に努める。

2 斑点落葉病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 巡回調査において、7月上旬までの発生量は「平年並」であった。
 (3) 防除上の留意点
 ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、定期的に予防散布を行う。

3 褐斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠

- ① 6月下旬の巡回調査で、発生は認められなかった。
 (3) 防除上の留意点
 ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、定期的に予防散布を行う。

4 輪紋病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 近年の越冬伝染源量は「平年並」とみられる。
 (3) 防除上の留意点
 ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、降雨前の予防散布を励行する。
 ② 突発的な降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を10日程度に縮める。
 ③ 今後、気温が高く、濡れ時間の長い降雨があると果実感染が増加するので注意する。

5 炭疽病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 近年の越冬伝染源量は「平年並」とみられる。
 (3) 防除上の留意点
 ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、降雨前の予防散布を励行する。
 ② 突発的な降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を10日程度に縮める。
 ③ 今後、気温が高く、濡れ時間の長い降雨があると果実感染が増加するので注意する。

6 リンゴハダニ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠
 ① 7月上旬までの発生量は、全般にほぼ「平年並」であった。
 (3) 防除上の留意点
 ① 発生を確認したら、防除基準に従って殺ダニ剤を選択し早めに防除する。
 ② 薬剤の散布ムラがおこらないように徒長枝切りや枝つりを行い、樹冠内部や葉裏まで散布する。

7 ナミハダニ

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多** 発生時期：**やや早**
 (2) 予報の根拠
 ① 7月上旬までの発生量は全般にほぼ「平年並」であった。
 (3) 防除上の留意点
 ① 発生を確認したら、「県防除基準」に従って殺ダニ剤を選択し早めに防除する。
 ② 薬剤の散布ムラがおこらないように徒長枝切りや枝つりを行い、樹冠内部や葉裏まで散布する。
 ③ 高温乾燥が続くと発生が増加するので早めに防除する。

8 ナシヒメシンクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
 (2) 予報の根拠

- ① 芯折れ症状の発生はほとんど認められなかった。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。
 - ② 第2世代幼虫の防除適期は、平坦地では7月中下旬頃である。

9 モモシンクイガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① フェロモントラップへの誘殺数は平年並であった。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。
 - ② 気温が高めに推移すると卵期間が短くなるため、散布間隔を10～14日とし、間隔をあけすぎないように防除する。

10 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 越冬世代成虫の発生量及び発生時期は、全般に平年並であった。
 - ② 6月下旬の巡回調査では、ハマキムシ類幼虫による被害新梢はほとんどみられなかった。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択して防除する。第2世代幼虫の防除適期は、平坦地では8月上旬頃である。

11 キンモンホソガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 6月下旬の巡回調査では、第2世代幼虫による寄生葉が散見された。
 - ② フェロモントラップ調査では発生時期がやや早い。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。

12 スモモヒメシンクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 越冬世代成虫の発生時期及び発生量は平年並であったが、第1世代の発生量はやや多く、発生時期もやや早い。
- (3) 防除上の留意点
 - ① りんご園では、第2世代成虫が発生する8月上旬からが重要防除時期である。
 - ② シンクイムシ類で登録のある薬剤を選択し、丁寧に散布する。多発園では散布間隔を10日間に縮める。

V なし

1 黒斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 巡回調査ほでの発病は認められず、これまでの発生量は平年並と考えられる。
 - ② 気象要因 (-) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みまたは少ないと予想されている。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って殺菌剤を散布し、間隔を開けすぎないように注意する。

2 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 巡回調査ほでの発病はほとんど認められず、発生量は平年並である。
 - ② 初期防除を逸した園地は伝染源量が多いと推測される。
 - ③ 気象要因 (-) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みまたは少ないと予想されている。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って殺菌剤を散布し、間隔を開けすぎないように注意する。

3 輪紋病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ② 気象要因 (-) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みまたは少ないと予想されている。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って殺菌剤を散布し、間隔を開けすぎないように注意する。
 - ② 特に西洋なしは本病に罹りやすい。

4 うどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 巡回調査ほでの発病はほとんど認められず、発生量は平年並である。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」に従って殺菌剤を散布する。多発させると落葉し次年度の花芽形成に影響するので注意する。

5 枝幹性病害（胴枯病・枝枯病）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ① 巡回調査ほでの発病は認められていない。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 殺菌剤は枝幹までよくかかるように散布する。

6 ハダニ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多**
- (2) 予報の根拠
- ① 巡回調査ほどナミハダニの寄生量増加が認められ、現状の寄生量は平年に比べやや多めに推移している。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発生状況を確認し寄生が認められた場合、殺ダニ剤を散布する。
- ② 殺ダニ剤は昨年使ったものと異なる剤を使用する。

7 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 全般に目立った発生はなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 第1世代成虫の発生時期は7月中旬頃であると予想される。ただし、標高により発生時期が異なってくるので注意する。

8 シンクイムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 全般に目立った発生はなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 多発園や産卵のピーク時は散布間隔が2週間以上とならないように注意する。
- ② 産卵のピーク時は標高によって異なるので、発生状況をよく観察して、適期防除に努める。

9 クワコナカイガラムシ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**早い**
- (2) 予報の根拠
- ① 有効積算温度による予測では、第1世代の産卵期、ふ化期とも平年よりも早い。
- (3) 防除上の留意点
- ① 標高により第1世代幼虫の発生時期が異なるので、発生状況に充分注意して、適期防除に努める。
- ② 常発地など多発が予想される園では、特別散布として有機リン剤などカイガラムシ類の防除に効果の高い薬剤を2週間間隔で2回以上散布する。

10 カメムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**多い**
- (2) 予報の根拠
- ① 南信農業試験場及び南信地区に設置されているフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシの誘殺数は平年よりも多い。
- ② 越冬場所（広葉樹林）でのチャバネアオカメムシのフェロモントラップによる捕獲個体数は昨年よりも多い。
- (3) 防除上の留意点
- ① 7月中旬以降、園地内の飛来状況を随時確認する。特に山際で毎年飛来がある

- 園地では天気が良く気温の高い日に飛来が多くなる傾向がある。
- ② 殺虫効果が高いのは合成ピレスロイド剤、有機リン剤である。有機リン剤は残効性がやや短く、ネオニコチノイド剤は吸汁阻害効果がある。
- ③ 合成ピレスロイド剤は指定地域のみで使用ができる。指定地域外では使用しない。

VI もも（ネクタリンを除く）

1 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の調査では発生は認められなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択して防除する。

2 せん孔細菌病

- (1) 予報の内容 発生量：**多い**
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬までの巡回調査では、発病葉は多くみられ、果実感染もみられた。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、収穫1ヶ月前まで防除する。

3 灰星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬までの巡回調査では、発生は認められなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し、収穫1ヶ月前～収穫直前の防除を徹底する。

4 ハダニ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生が見られなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発生を確認したら早めに殺ダニ剤を散布する。

5 シンクイムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬までのフェロモントラップ調査の誘殺数は少なかった。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。
- ② 7月下旬～8月上旬に除袋する品種（川中島白桃等）では、除袋後にシンクイ

ムシ類の寄生を受けないよう、除袋後速やかに防除を行う。

6 モモハモグリガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬までの巡回調査では、第2世代幼虫による寄生葉率はみられず、全般に平年並であった。
(3) 防除上の留意点
① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。

7 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 越冬世代成虫の発生量及び発生時期は、平年並と推測された。
(3) 防除上の留意点
① 「県防除基準」に従って薬剤を選択し防除する。

Ⅶ ぶどう

1 ベと病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 巡回調査では発生はみられなかったが、各地で散見されている。
(3) 防除上の留意点
① 早めに袋掛けを行い、ボルドー液を散布する。
② 新梢整理を行って薬液が十分かかるようにする。
③ 散布間隔をあけすぎないように注意する。

2 晩腐病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 感染時期である梅雨期の降水量が少なかった。
(3) 防除上の留意点
① 速やかに袋掛けや笠かけを行い、果房への感染を防ぐ。

3 さび病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった。
② 近年、発生量は地域によりバラツキがあるが、全般に越冬伝染源量はほぼ平年並と推測される。
(3) 防除上の留意点
① ベと病防除に用いるボルドー液の散布で発病が軽減される。

4 チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、一部のほ場でわずかに寄生がみられた程度であった。
(3) 防除上の留意点
① 梅雨明け後頃から発生量が増加する。
② できるだけ早く袋掛けを済ませ、薬剤散布する。

5 ブドウトラカミキリ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 巡回調査では、寄生は認められなかった。
(3) 防除上の留意点
① 発生があれば、8月下旬に防除基準に従って薬剤を選択し防除する。

6 クビアカスカシバ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬までのフェロモントラップ調査では、誘殺数が平年より多かった。
(3) 防除上の留意点
① 発生が多い園地では、登録のある殺虫剤を、袋かけ後の7月下旬～8月上旬に枝幹部に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
② 7月下旬以降、クビアカスカシバに寄生されていると虫糞排出が目立ち始めるので、発見したら幼虫を捕殺する。

Ⅷ 野 菜

1 キュウリ斑点細菌病

- (1) 予報の内容 発生量：**やや少** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
② 気象要因(－) 気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(3) 防除上の留意点
① 発病を認めたら直ちに、「農作物病害虫・雑草防除基準」(以下「県防除基準」と略す。)により薬剤を選択して防除を行う。
② 被害の甚だしい葉、果実は除去する。

2 キュウリべと病

- (1) 予報の内容 発生量：**やや少** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
② 気象要因(－) 気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(3) 防除上の留意点
① 発病を認めたら直ちに、「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
② 下葉で発病の著しいものは摘葉する。

③ 多湿条件で多発する。

3 キュウリうどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発病を認めたら直ちに、「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② 下葉で発病の著しいものは摘葉する。

4 キュウリ炭疽病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発病を認めたら直ちに、「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② 初発時の発病葉はすぐに摘葉し、処分する。
- ③ 残さについた病原菌が伝染源となり、降雨時の泥はね等により感染するので、残さを除去し、敷きワラ等で泥はねを防ぐ。
- ④ 高温多湿条件で多発する。

5 キュウリ褐斑病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発病を認めたら直ちに、「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② 下葉で発病の著しいものは摘葉する。
- ③ 前年発生ほ場では、残渣や資材に病原菌が付着しているので十分注意する。
- ④ 高温多湿条件で多発する。

6 キュウリモザイク病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発病株は直ちに除去して処分する。
- ② 感染植物を吸汁した、モモアカアブラムシ・ワタアブラムシの吸汁により伝染する。（アブラムシ類の防除については「果菜類（きゅうり、トマト等）のアザミウマ類・アブラムシ類」の項を参照。）
- ③ 汁液伝染する恐れがあるので、畝ごとに使用するハサミを替えるなどして、汚

染されたハサミにより、ほ場全体に拡がらないように注意する。

7 トマト灰色かび病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 発病果の除去、ハウス内の除湿など環境対策を実施する。
- ② 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ③ くん煙剤、常温煙霧法の利用はハウス内の湿度上昇抑制に有効である。

8 果菜類（きゅうり、トマト等）のアザミウマ類

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、きゅうりの一部露地栽培ほ場で発生がみられた。
- ② 気象要因（十）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② 施設栽培で、日中の気温上昇により側窓を解放する場合は、防虫ネットを設置するなど飛び込みに注意する。

9 果菜類（きゅうり、トマト等）のアブラムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、きゅうりの一部露地栽培ほ場で発生がみられた。
- ② 気象要因（十）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
（露地栽培では高温となる夏は減少する傾向があるが、施設栽培では1年中発生。）
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② 施設栽培で、日中の気温上昇により側窓を解放する場合は、防虫ネットを設置するなど飛び込みに注意する。

10 レタスべと病・菌核病・灰色かび病・すそ枯病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、発生は確認されていない。
- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
- ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
- ② いずれの病害も本葉10葉頃から、2回程度防除すると効果が高い。

11 レタス斑点細菌病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 7月上旬の巡回調査では、一部地域のほ場で発生がみられた。

- ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
 - ② 降雨が多いと多発する。

12 レタス軟腐病・腐敗病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、軟腐病の発生が一部ほ場でみられた。
 - ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
 - ② 降雨前あるいは降雨後直ぐに薬剤を散布する。
 - ③ 常発地・多発地では、排水対策を行う。
 - ④ 高温多雨条件で多発する。

13 アブラナ科野菜の黒斑細菌病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、キャベツの一部ほ場で発生がみられた。
- (3) 防除上の留意点
 - ① グリーンボールは特に発生しやすいので注意する。
 - ② 育苗時の発生に注意し、発病苗とその周辺の苗は定植に用いない。
 - ③ 発生ほ場の被害茎葉は、土壌中の病原菌密度が増加するのですき込まない。
 - ④ 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
 - ⑤ 降雨が多いと多発する。

14 ハクサイピシウム腐敗病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、発生はみられなかった。
 - ② 近年発生が増加している。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 高温期は軟腐病が併発しやすいので、軟腐病の防除も行う。
 - ② 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
 - ③ 降雨が多いと多発する。梅雨期に発生が多い。

15 ハクサイ軟腐病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、一部ほ場で発生がみられた。例年この時期から発生が急増する。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 害虫の食害痕から発病しやすいので、害虫防除をする。
 - ② 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。

- ③ 高温多湿条件で多発する。

16 ハクサイベと病

- (1) 予報の内容 発生量：やや少 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、発生は確認されていない。
 - ② 低温多湿条件のときに発生が多い。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 本病に感受性の高い品種の作付けは避ける。
 - ② 定植直後から定期的に予防散布を実施する。
 - ③ 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。

17 アスパラガス茎枯病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、一部地域のほ場で発生がみられた。例年この時期から発生が急増する。
 - ② 気象要因（一）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 雨除けをすると、茎枯病の予防効果が高い。
 - ② 防除は収穫打ち切り後、立茎完了までの期間が特に重要である。
 - ③ 切り株や残さについた病原菌が伝染源となり、降雨時の泥はね等により感染するので、残さを除去し、土寄せや敷きワラ等で泥はねを防ぐ。
 - ④ 病茎は早期に刈り取り、穴を掘って埋めるなどの処分をする。
 - ⑤ 気温が高く、降水量が多いと多発する。

18 オオタバコガ（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、一部のジュース用トマトの栽培ほ場で果実への食入被害がみられはじめている。
 - ② 気象要因（十）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点
 - ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
 - ② 系統の違う薬剤を、ローテーションしながら散布する。
 - ③ 結球野菜では、結球始期を中心に1週間間隔で2～3回防除を行う。

19 ヨトウガ類（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
 - ① 7月上旬の巡回調査では、セルリーの一部ほ場で卵塊が確認されている。フェロモントラップ調査では、ヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウの誘殺数は現在までのところ平年並である。
 - ② 気象要因（十）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
- (3) 防除上の留意点

- ① 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。

20 ハモグリバエ類（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、一部地域のネギで発生がみられた。
② 気象要因（＋）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(3) 防除上の留意点
① 苗床での防除を徹底する。
② 育苗施設では粘着トラップを設置し、成虫を捕殺する。
③ 「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
④ 収穫後は、残さの処分を徹底する。

21 アブラムシ類（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、一部地域のアスパラガスで発生がみられた。
② 気象要因（－）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(露地栽培では高温となる夏は減少する傾向があるが、施設栽培では1年中発生。)
(3) 防除上の留意点
① 発生を認めたら、多発する前に「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
② レタスヒゲナガアブラムシは、レタスの結球期前に重点防除をおこなう。

22 アザミウマ類（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、ねぎ・アスパラガス等で発生がみられた。
② 気象要因（＋）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(3) 防除上の留意点
① 育苗期又は定植時に適用のある薬剤があれば使用する。
② 発生を認めたら、多発する前に「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
③ アザミウマの種類によって薬剤に対する感受性が違うので、防除を実施したら効果を確認し、効果の低い場合は系統の違う剤で防除する。
④ ほ場周辺の雑草に寄生し発生源となるので、雑草防除等ほ場衛生を心がける。

23 ハダニ類（野菜、花き全般）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
① 7月上旬の巡回調査では、アスパラガスの一部ほ場で発生がみられた。
② 例年盛夏期以降多発する。
③ 気象要因（＋）気温が高く、降水量は平年並または少ない。
(3) 防除上の留意点

- ① 施設などで乾燥状態が続くと多発しやすい。
② 被害の早期発見に努め、発生を認めたら、多発する前に「県防除基準」により薬剤を選択して防除を行う。
③ 合成ピレスロイド剤の散布により逆にハダニ類が増えてしまう恐れがあるので、防除には使用しない。